

地域交流センター通信

03・04 合併号

巻頭言

地域に根ざし、世界とつながる

田中孝彦

2

特集1

地域に根ざす
教育の創造へ

4

特集2

甲斐の文化の香り

16

一年を振り返って

24

地域の声

25

トピックス

26

都留文科大学 地域交流研究センターとは？

地域交流研究センターでは、地域に根ざし地域と共同した活動を推進し、つぎのような取り組みをおこないます。

- 1) 地域交流に関するプロジェクトの推進
- 2) 学校の先生方などの教育相談
- 3) 地域のニーズに応えた貢献活動
- 4) さまざまな地域交流の連携の推進

題字 黒部行子



地域に 根ざし、 世界と つながる

田中孝彦
教育思想・臨床教育学

臨床教育学を担当して

私は、昨年の四月から、都留文科大
学で働かせてもらっています。この大
学での私の主な仕事は、新しく発足し
た臨床教育学専攻の大学院で、臨
床教育学の開拓を試み、それを教師
など教育関連専門職や発達援助専門職
の養成のための教育につなげること
です。

臨床教育学という学問が確立してい
るわけではありません。しかし、ここ十
数年の間に、日本の教育研究の世界に
おいて、臨床教育学の動きが広がって
きています。私は、この動きの背後に
は、急激な社会変動の下で、生育過程
において困難に直面して不安定状態に
陥っている子どもたち、子どもたちを
どう支えればよいのか迷っている父母
たち・専門家たちの新しい学問への要
求があると判断しています。

「子どもの声を聴く」ことと 「地域に根ざす」こと

もともと、私の教育研究は、日本の
民衆の子ども観・発達観・学習観・教育
観についての思想的接近から始まり
ました。そのなかで、現代を生きる子
ども、父母、教師・援助者たちの生の
声に耳を傾け、そこから問題を探るこ

とを基本的な研究方法とするようにな
りました。とくにこの十年ほどは、困
難に直面した子どもの声を聴くことを
軸に、社会・人間関係・教育の質を問
い直す臨床教育学の開拓を、私自身の
仕事とするようになっていきます。

子どもたちは、真空の中を生きるの
ではなく、特定の時代、特定の地域の
中で成長しています。彼らが、困難に
遭遇するのも、成長を支えてくれる他
者に出会うのも、地域の日常生活にお
いてです。したがって、私は、子ども
たちの声を聴こうとする場合には、地
域に抜け、彼らとできるだけ自然に
つきあい、彼らの声に耳を傾け、彼ら
の感じていること、考えていること、
望んでいることを理解しようとするこ
とが大切だと考えています。

そんなプリミティブ（素朴）なこと
で学問になるのかと言われるかもしれ
ません。しかし、「子どもの声を聴く」
「地域に根ざす」という思想を深めな
がら、それを学問の方法としても洗練
していく以外に、臨床教育学の開拓の
道も教育学の革新の道もないと考えて
いるのです。

フィンランドでの出会い

昨秋、私は、「臨床教育学の展開と
教師教育の改革」をテーマとする共

同研究の一環として、本学の森博俊さ
ん、北海道教育大学の庄井良信さんと
ともに、約二週間のフィンランド調査
に出かけました。私たちは、滞在期間
のほとんどをヘルシンキで過ごしまし
たが、そのうちの二日間、北極圏に近
いカヤーニという町にある教員養成大
学を訪ねました。

カヤーニは人口三万人足らずの小さ
な町です。住民たちは、「効率」の名
の下に地域を破壊しかねない「グロー
バリゼーション」「新自由主義」の圧
力に抗して、伝統的な林業・木工業・
製紙業を守り、新たな石材（アスベス
トを含まない建設材など）製造業を起
こすなど、地域と生活を守る努力を展
開していました。そして教員養成大学
では、地域に生まれ育ち生きる民衆の
子どもたちの成長を支える、そうした
教師を育てるという視点から、教師教
育の内容の改革を試みていました。

例えば、この大学では、地域の乳幼
児のためのデイケア（保育）センター
を開設し、小・中学校の教師になろう
とする学生たちに、そこで実習し、幼
い子どもたちやその親たちに接して学
ぶ機会を創り出していました。これは
改革の一つの試みに過ぎませんが、地
域に生まれ育つ子どもたちが人生の
途上で直面する問題や発達の課題をり

アルに感じ取って、そうした子どもた
ちの成長を支える教育実践を構想する
ことができる教養と能力を育てること
が、教師教育の今日的課題として重視
されていたわけです。

地域に根ざし、世界とつなが るセンターとして

二日間の調査のまとめのディスカッ
ションで、私たちは、都留文科大
で始めている改革の模索を説明しなが
ら、それとカヤーニの教員
養成大学の試みとの間に大
きな共通性があることを感
じたというのを伝えまし
た。カヤーニの教員養成大
学のスタッフの人たちも、
お互いの考えていることが
あまりに似ているので驚い
ていました。改革の中心
な担い手の一人であるハッ
カライネン教授からは、「研
究交流・共同研究の協定を
結べないか」という具体的
な提案までなされたほどで
す。

フィンランドのカヤーニ
での出会いを通して、私は、
「地域に根ざす」という思想
が、今、国境を越えて、現



写真右：ヘルシンキ大学の「活動理論・発達のワー
クリサーチセンター」で、ユリア・エンゲストロ
ム教授にインタビュー。エンゲストロムは、ヴィ
ゴツキーに立ち戻りながら、歴史的・文化的な文
脈のなかでの人間発達について、創造的な理論的
研究とフィールドワークを展開している。今日、
国際的な広がりを見せている「ヴィゴツキー・ル
ネサンス」の動きのなかでも、独自の位置を占め
ている。日本で訳されている著書に、『拡張によ
る学習』（1999、新曜社）がある。

写真左：カヤーニの教員養成のデイケアセンター
で、子どもたちに朝の挨拶。実習に入っている学
生たちの姿も見える。

写真左下：職人たちの像。ヘルシンキのシンボル
の一つ。ヘルシンキ中央駅近くにあった。



代の民衆生活と人間発達の研究のため
の重要な原理の一つになるうとしてい
るということ、改めて実感しました。
そして、「地域に根ざす」ことが「世
界とつながる」ことになる、そのよう
な交流・研究の一つのユニークなセン
ターとして、私たちの「地域交流研究
センター」が発展していくことへの期
待を強くしているところです。

たなか たかひこ 本学教員 教育思想・臨床教育学
写真・庄井良信（北海道教育大学）

地域に根ざす教育の創造へ

特集1

特集1では、センターにおかれた「教育相談部門」が、この一年間に地域と共同しながら行ってきた特徴的な活動をとりあげ紹介します。これらの活動を通して垣間見えてきたものは、まだ萌芽的ではありませんが、センターの活動が、相談室を中心とした活動のみではなく、学校現場での実践・研究ともつながり、さらに子どもや青年の生存と発達を支える地域づくりに連なる活動であるように思われます。一方で、学校独自の役割を大切にしつつ、他方では、それを越えて求められる困難をかかえた子ども・青年の成長や発達を支える、多様な実践の創出ということがあります。その近未来は、都留を中心に、福祉や医療の現場、行政などの分野で活動する人々と連携した、地域の総合的な人間発達援助活動の創造へとむかうのではないのでしょうか。

なかれ私たちのくらしや子育てのなかにも潜んでいることに気づかされます。

都留での発達援助の取り組み

「現代」という時代は、子どもが地域に生まれ、ふつうに地域でくらし育つことをとても難しくしているのではないのでしょうか。とくに「障害」があったり、家庭が何らかの事情で困難をかかえている場合、問題は二重にも三重にも加重されて当事者に集中的にのしかかってきます。いろいろなところで個人の責任が強調されますが、そう言われること自体が困難を増幅しているようにも思われます。

これからの教育の仕事は、現代社会に深く起因し広がるこれらの困難を直視し、それと向き合っていくかば現実的な力をもち得ないし、地域にくらす人々の期待にも応えられないでしょう。一方では地球的な視野をもつていろいろな地域の営みと交流し、学び合っていくことが大切ですが、そのためにもこの地域で、一人ひとりの子どもや青年の具体的な成長・発達の姿や、それに関わる種々の問題のからみ合いを見つめ考えることが必要です。

このような総合的な視点をもった人間発達援助の活動や研究を少しずつでも蓄積し進めるために、センターでは「教育相談部門」を設け、都留や郡内地域を中心に、子ども・青年や教育に携わる方々と、共同した活動の創出に努めてきました。

この一年間は、まずはできることからと、学校現場で困難をかかえた先生方の相談支援や、現職教員講座をはじめとする研修機会の提供などを行ってきました。ここに述べた問題意識からすればほんの

地域人間発達援助活動の創造

—「教育相談部門」の近未来—

森 博俊

困難をかかえる子どもたち

都留市内の小・中学校に通っている子どもは、現在およそ三三〇〇人います。その大部分は、おそらく、都留でくらし、都留で育っている子どもたちです。

八つの小学校、三つの中学校に通う子どもたちには、いろいろな事情で学校に通えなかったり、行くことはできても教室に入るのがつらく、保健室や

空き教室で学習している子どもたちもいます。全国的には一強の不登校の子どもがいると言われることから、統計的には四〇名前後の小・中学生が、学校に通えないことになりました。

また、近年の文部科学省の調査によると、小・中学校の普通学級に六%くらいの割合で、「LD（学習障害）」とか「ADHD（注意欠陥/多動性障害）」「高機能自閉症」とよばれる軽度の発達障害をもつ子どもが在籍しています。単純に計算して、都留市ではおよそ二〇〇人になります。あらためてLD云々という「一体どんな子？」と思うかもしれませんが、そんなに特別な子どもではありません。症状は個々のケースで違いますが、たとえばどうしても落ち着いて先生の話に集中できないとか、友達とうまく関わりをもったり、集団的な活動に参加することが苦手な子どもたちです。今までもすると「親のしつけがなっていない」とか、「性格が悪い」などとみられることが多かったのですが、周囲の配慮や適切な手だてがあれば、多くの場合クラスの中で普通に育っていきます。

他方、少なからぬ家庭が、今日、家族関係にさまざまな困難をかかえています。子どもの虐待事件や家庭内の暴力、いわゆる「家庭崩壊」等はそれが集中的に現れたものですが、困難はしばしば子どもの安心を奪い、成長・発達に少なからぬ影響を及ぼしています。外から家庭の非を責めるのは簡単ですが、それぞれのケースには当事者個人のみには帰すことのできない、複雑な要因がからまり働いています。そして、それらのケースを丁寧に見ていくと、その要因は決して特殊なものばかりではなく、多かれ少

小さな試みですが、それでも動き出す中でいろいろな新しい出会いがあり、地域で活動し、考える手応えと共同の可能性が生まれています。

たとえば、東桂小学校・中学校と連携した学生たちのチューター活動*は、文部科学省の施策を活用したのですが、子どもたちにもいつもの先生とはちがう関係を経験する機会となり、新しい可能性が芽生えつつあります。とくに教室に入れない子どもや、情緒的な困難をかかえた子どもたちの個別的な人間関係の模索は、とまどいをはらみつつも双方にとつて貴重な体験になっているようです。

また、東桂中学校では、学習チューター活動を一つの契機に、先生方と大学教員が共同して困難をかかえる子どもを理解するためのカンファレンス（ケース検討会）が試みられています。一つ一つのケースを大切に、その困難の背景や子どもの生活史を丁寧に読み解きながら子どもの現実に向き、実践の課題とあり方を探っていきます。このような現場での実践と結びついた地道な努力が、教師と教育実践を支えるとともに、教師の専門的な力量形成のひとつの力にもなるのではないのでしょうか。

特集1で紹介する諸活動は、地域に根ざす教育の創造をめざす私たちの一年目にふさわしい広がり内容をもっていたように思います。これらを新しいスタートラインにして、さらにしっかりとした基礎づくりに取り組みたいと考えています。

もり ひろとし（本学教員 障害児教育）

東桂小学校での学習チューター活動の様子(8-9頁に関連記事)



かえで養護学校(6-7頁に関連記事)



*学習チューター活動：先生のアシスタントとして学生が子どもたちの相談相手になったり、学習の支援などをする活動

「子ども理解の カンファレンス」 の試みから

中込百合

カンファレンスに参加して

今年度、甲府市のかえで養護学校、及び都留市の東桂中学校において「子ども理解のカンファレンス」*が行われました。私は、現職教員の内地留学研修で都留文科大学の研究生として、この間、かえで養護学校のカンファレンスに参加させていただき、また、東桂中学校で中心となっている望月育代先生のお話をうかがうことができました。そのことを通して、「子ども理解のカンファレンス」について感じたことや考えたことを書いてみたいと思います。

子ども理解の深まり

かえで養護学校における「子ども理解のカンファ



かえで養護学校の校歌

かえで養護学校の校舎



東桂中学校での学習チューター活動

「カンファレンス」は、昨年の五月から、ほぼ月一回のペースで開かれました。そこでは、二人の子どもの事例として取り上げ、その子どもの具体的な姿に即して、これまでの経験やそのときの思い、その行動の奥にある気持ちなど様々な視点から子どもの内面世界を探り、子どもの全体像をつかむための話し合いを重ねられました。そして、その子のかかえる問題に迫り、理解を深めていきました。

ある子どもの場合には、「きのうの話」として子どもがたどったしく語った内容が、その子どもの姿を理解するための手がかりとなり、何を伝えようとしているか、どんなことを表現しているかを検討するなかで、その子のおかれた厳しい生活状況を教師側が受けとめていったように思います。

また、もう一人の子どもの担任の先生が、一年間のまとめのなかで、「自分のなかに迷いが出てきて、今もそれはある」と語ったことも印象的でした。カンファレンスを通して担任自身が、行動の奥にある子どもの内面の理解へとその視点を移すにつれて、これまでの自分の捉え方がどうだったのか、実践の意図はどうだったのかなどと教師自身のなかに葛藤が生まれてきている、それが「迷い」という言葉で語られたことなのかもしれないと感じました。

教師の実践的構えの変化

カンファレンスで深められた子ども理解は、それをもとに子どもにどういう力をつけていったらいいのか、そのためにはどういう教材を用意し、どういう実践をすればいいのかという課題へとつながっていきました。カンファレンスをもとに実践をし、そ

れを材料にまた子ども理解を深めるカンファレンスを持つ。そのサイクルのなかで、担任の先生方が少しずつ何か変化していつているように私は感じました。それは、教師自身の子どもとの向き合い方が変わってきたのではないかと、だからそのように感じたのではないかと考えます。

教師が子どもを前にしたときに発する言葉、立つ位置、目線など教師の構えそのものが、その子どもをどう理解しているかによって変化していくのだと思います。それまでは、たいして問題がないと思えていた子どもの姿に、実は大きな意味があると見えてきたり、問題行動だとしてやめさせようとしていたことが、その子にとっては必然性のあることだと捉え直されたりする。カンファレンスを重ねていると、見方や捉え方を変えることで理解できなくなっていたことが理解できるようになる、その問題をどう捉えるかでアプローチの方法も変わってくるがある、そんな実感をもちました。

子どもの成長に必要な安心の場

年間を通して、このカンファレンスの取り組みに参加させていただき、劇的ともいえる子どもたちの成長を目の当たりにさせてもらいました。はじめは、学年が変わり緊張状態にあった子どもたちが、担任の先生との安心した人間関係を築き、その関係をよりどころに他の先生や周りの子どもたちとの関係を広げ、訪れるたびに生き生きとした表情を見せてくれるようになりました。子どもたちにとって本当に安心の場となっているのだと思いました。安心の場というのは自分の思いや感情を受けとめてもらえる

という実感が持てるものだと考えます。

先生方がその子どもの思いや感情をうけとめ、理解を深め、要求に応えようと実践をされた、その実践を支えていたのが「子ども理解のカンファレンス」ではなかったかと考えます。また、子どもはそれぞれ独自の発達・成長をし、その過程で、さまざまな感情や思いを抱いて生活しています。そのことを教師自身が実感として受けとめることがどれだけできるか、そんなことが問われているように思いました。子どものケースにそくして、「子ども理解のカンファレンス」を行う意味はそんなところにもあるように感じました。

教師同士の支えあう関係を創る

「子ども理解のカンファレンス」は子どもや担任にとつて意味があると同時に、それは教師同士にとつても意味があると感じました。それは、そのプロセスを通して、教師同士の支え合う関係が強まっているのではないかと、思うからです。その点について、東桂中学校で中心になって取り組まれている望月先生はこんなふうに話されていました。

「二つの事例を取り上げ、これまで一回、カンファレンスを行いました。最初に担任が報告し、それをもとにしなが、いろんな教師がいろんな場面でのかわりを通して感じたことを出しました。カンファレンスをやってみて、その生徒への、担任をはじめとするそれぞれの教師のいろんな場面での接し方を知るなかで、これまで見えなかったことや知らなかった子どものことがわかってきました。私だけでなくおそらく他の先生方もそうなのではないか

と思います。また、自分が悩んだり苦しんだりしていたことが、他の先生と同じ思いだったとわかることもありました。そういうことを通して、みんながみんなにかかわっていこうという意識がより強くなり、言葉かけをしたりかかわったりしているように感じます。二回目のカンファレンスでは、一回目以降の生徒の変化と実践の深まりについて、田中孝彦先生、森博俊先生に評価できるところがたくさんあると話していただくなかで、私自身もうれしかったし、担任も元気づけられました。校内だけでなく、お二人の先生方に参加していただいたことにもすごく意味がありました。」

このような望月先生のお話から、一人の子どもの困難にそくして、子どもの今の姿をどう理解したらいいかという共通の課題に全職員で取り組むことで、自分一人で苦しさを抱え込みがちな教師自身が元気づけられ、勇気づけられ、支えられているという実感をもつことができる、そういう場を創り出せるのではないかと考えます。

地域の教育現場と大学の結び目として

これら二校における取り組みはそれぞれの現場に応じた形で行われています。いろいろな形があり、現場の状況に応じて工夫される必要もあると思います。そして、この二つの取り組みには、都留文科大が臨床教育実践学専攻の先生が継続的に参加し、協力されています。都留文科大が地域交流センターが核となり、現場とつながった取り組みが広まりつつあると、実感しています。

なかみ ゆり（本学研究生）

*子ども理解のカンファレンス：困難をかかえた子どもを理解するためのケース検討会

地域で 子どもを支える 学習チューターの動き

川橋保夫

学習チューター制度の試み

都留文科大学の学生が都留市内の小中学校に出かけ、「放課後学習チューター」として子どもたちの学習・成長をサポートをする制度が試みに始まって約一年が過ぎようとしています。

現在、学生たちは、東桂小学校と東桂中学校で活動しています。学習チューターの仕事をしてみようと思ったきっかけは、「教師になりたいから」「興味があって」など、さまざまです。学生たちは、小学校では、主に、七人程度の子どものを担当し、一緒に勉強をしたり、その日の宿題を見たりといった学習

支援を行ってきました。中学校では、学習支援だけでなく、部活動の手伝いや、様々な理由から学習や学校生活に困難を抱える子どもたちに寄り添って、その成長を支える活動にも参加しました。

そこで今回、実際に放課後学習チューターの活動に参加した文学専攻科の中島哲士さん、国文学科四年の岸下智美さん、社会学科四年岡田直人さんの座談会を企画し、この一年を通して経験したことや今後に向けての課題を語ってもらいました。

子ども・地域を見る目が変わってきた

中学校の部活動の手伝いに参加した学生は、「試合の日に、生徒のご両親とお会いして、色々なお話をする機会がありました。その中で、都留という地域の話や家での子ども様子など色々なことを教えてもらいました。このような経験をすることによって、四年近く住んでいる都留の町や生徒を見る視点が広がり、地域と生徒のことをより深く理解できるようになったと思います。」と語りました。

また、小学校で学習チューターとして活動している学生は、「学習を見るということが中心なので、都留市という地域とのつながりを直接意識する場面には出会うことはありませんでした。けれど、学校行事に参加させていただいて、自分の受け持っている子どもたち以外の子どもと触れ合うことができ、今までと比べて都留市の子どもたちをより身近に感じられるようになりました。」「私が気づいていないときでも、子どものほうが気づいていて、学校にうかがったときに、『この間、道歩いてたね。』と気さくに声をかけてくれるようになりました。」「自

分たちのことを、放課後勉強を見てくれるお兄さん、お姉さんと見てくれていたようで、自分も肩ひじを張らずに、子どもたちの本音を色々と聞いたり、本音で話すこともできました。」と語っていました。

このように、学生たちは、放課後学習チューターの仕事を通して、一人一人の子どもたちと出会い、保護者や地域の人たちと結びつきを創り、都留市という地域とのつながりを強めてきました。このことが、学生たちにとって何よりも大きなできごとだったようです。

自分自身の学習・成長の課題を発見できた

また、学生たちは、放課後学習チューターの体験を通して発見した、自分自身の学習と成長の課題についても語ってくれました。

「普通の子どもたちとの関係ももちろんですが、とくに困難を抱えた子どもたちとどのように接すればいいのか、もっと大学で学ぶ必要があると思っていました。これは、現在の学校現場でも問題になっている「軽度発達障害」*の子どもたちへの支援の具体的な方法を学びたいという意見です。

「子どもたちがつらそうにしているときに、どう励ましたり声掛けをしたりしたらいいのか、子どもたちが活動をしやすい雰囲気を作ること、苦労しました。この学生は、子どもたちが活動しやすい雰囲気づくりの重要性を強く感じ、そのような雰囲気を作っていく方法を学ぶことを自らの課題としてあげています。

「子どもたちとの距離のとり方が難しかった。学習チューターというのは、教師ではないので、生徒

が親しみをもって接してくれる反面、近すぎると友だちみたいになってしまうので、どう接すればいいのか悩んでいる人もいました。いい意味での距離をとる必要があることも感じました。」この学生は、放課後学習チューターの活動の中で、子どもたちとの距離をどうとればいいのか悩んだ経験から、子どもと教師・おとなの「距離のとりかた」を考えるべき課題として発見したといます。

地域の子ども・学校と接する機会を広げてほしい

「放課後学習チューター」制度は第一歩を踏み出したばかりで、改善すべき課題が数多くあります。たとえば、「先生方に、私たちがどのような形で動いていけば助かるのか、もっと具体的に言ってい

ただけると、私たちも動きやすくなると思います。」といった意見がありました。先生たちと学生たちとのコミュニケーションをとる機会を作り、この制度について共通理解を作り上げていく課題も大きいようです。

手探りから始まった放課後学習チューター制度も、もうすぐ二年目を迎えようとしています。様々

な課題があることは確かですが、一年目の活動に参加した学生たちの話からは、子どもたちを支え、地域との結びつきを深め、自分自身の学習と成長の課題を発見する機会として、このような試みは学生にとって大きな意味があるように思われました。

かわはし やすお（本学大学院生 臨床教育実践専攻）
写真提供・東桂中学校（写真上）
東桂小学校（写真下）

東桂中学校での学習チューター活動



東桂小学校での学習チューター活動

*軽度発達障害:「よむこと」「話すこと」などの特定の学習能力に困難があったり、集中できないなどの症状を示す。最近、教育現場で話題になっている「LD」「ADHD」など。

現場教師が求める 学習・研修の質

—現職教員教育講座とその受講生の声から

小坂文則

現職教員講座から

昨年の八月一日から三日間、本年度発足した大学の臨床教育実践学専攻のスタッフを中心に、「今日の子どもの抱える『問題』にどう向き合うか」をテーマに現職教員教育講座が開催され、小・中・高校の教員を中心にのべ二七五名の参加がありました。

講座内容は、一日目が田中孝彦先生（本学教員・臨床教育学）の「今日の教師と子ども理解の問題」

ん。しかし、それだけでは心の発達を促すことや、対人関係・集団関係を学ばせることなどについては充分でないように感じている教師が多くなりました。「限られた時間のなかで、しなければならぬものを作りつつ、たとえば自分の心のなかを見つめ直していく機会や、友だちのよき、自分自身の素晴らしさを感じたり、気づいたり出来るような学習を子どもたちに経験させていきたいと思うが、どのようにしたらいいのか」といった問題が、何人もから出されていました。

第四に教師としての自分自身のありかたを振り返ってみたい発言がもっとも多くありました。例えば、「教師として現場で経験を積むうちに、子どもたちへの接し方が固定的な感じになってしまっていることに、研修を受けて改めて気づいた」、「今まで実践をしてきたなかで、ちょっと気になる様子の子がいたが、LD・ADHDなどについての知識がなく適切な対応ができなかった、そのことについて今反省している」などの意見がありました。実際に現場で働いていると日々の生活に追われ、自分の実践について見直すきっかけや時間がない現実があり、また現場のなかばかりにいるとさまざまな情報を得ることが難しいということもあり、そのような面から教師としての自分自身を見つめなおし、今後につなげていく、という意味で今回の研修を位置づけている教師が多かったように思います。

大学の現職講座に現場教師が求めるもの

現場の教師は研修というと、いわゆる「官制研修」についてイメージすることが多いと思います。そこ

という題での基調講演と「子ども理解のカンファレンスのすすめ」という提案、二日目が森博俊先生（本学教員・障害児教育）の「LD、ADHDなどの子どもと学校教育の課題」という講演と東京都の小学校通級指導教室教員植村芳美氏による特殊学級の実践事例の報告、三日目は河村茂雄先生（本学教員・教育臨床心理学）の「学級崩壊を予防する学級経営のあり方」学級集団分析を通して」という講演とワークショップ（実習）でした。

私は現職の小学校教員で今年度の四月からこの大学院で臨床教育学について学んでいるものです。今回の講座にも三日間参加し、現職の先生方と一緒に学習させていただきました。ここでは、その経験から考えたことと参加者の意見をもとに、地域の教師の求めている研修と、「現職教員講座」の今後の方向について考えてみたいと思います。

学校現場の現状と教師の悩み・問題意識

現在の学校は、二〇〇二年からの学校五日制実施に伴い、さまざまな行事や学習内容を、従来よりもあわせて指導しなくてはならなくなっています。また、それ以外でも、諸会議や事務作業の増加など、教師にとってゆとりのある生活はなかなか送ることができないのが現状だといえます。そんななかで教師たちはどんな点で悩み、苦しんでいるのか。今回の講座の内容と関係して参加者の意見からはいくつかの共通の傾向が見られました。今回はそれを大きく四つにまとめてみました。

まず第一に人間関係に関する問題です。子どもたち同士がうまく人間関係を築くことができない、ク

では学習指導要領に沿った教科指導・生徒指導の考え方や方法論を中心に研修がされています。では、大学が行う現職講座に対して地域の教職員から求められているものは何でしょうか。

今回の講座には多くの先生方が自発的に参加されていました。それは、現在の学校現場のなかで何ら



盛況だった現職教員教育講座

かの問題意識を持ち、通り一遍の「研修」にはないものを求めていることだと思えます。教師たちは、最新の具体的な知識や対応の仕方など知識面で学ぶものがあると同時に、厳しい現状のなかで教師自身が

ラスのなかの人間関係が見えてこない、本音での交流を子どもたちの間に作るができないなどという状況のなかで、子どもたちの人間関係をいかにつくっていったらいいのかを改めて考えてみたいという意見が多くありました。またこのことと関連して、「子どもたちの人間関係の悩みなどを受けとめられるように、ふだんからなるべく子どもたちに接する時間をたくさん持とうと努力はしているつもりですが、どうしても忙しくなると、子どもの心の叫びをしっかりと受けとめられなくなってしまうように思います」という意見もありました。

第二に職場づくりに関する問題です。このことについては「子ども理解のカンファレンス」と関連しての意見がとくに多かったのですが、実際に学級崩壊のような状態を経験して悩んでいるときに、同僚の支援・協力が救ってくれたという内容のものがいくつもありました。しかし一方で、「自分の学校では子ども理解のための情報交換を行っているが、学校規模の問題もあり、『情報交換』で終わってしまいうことが多い」「担任として何か問題があった場合、全員で協力してというよりは、『各自で』という状態が多いように思う」といった意見も多くありました。とくに学校五日制になり学校現場が想像以上に忙しくなり、教師同士が十分に話をする時間がほとんどとれない日々のなかで、「子ども理解」を深め合えるような職場集団をどのようにつくっていったらいいのかという問いが出されていました。

第三に学習内容に関する問題です。実際、現場としては学習指導要領との関係もあり、授業では教科書を学ばせることに重点を置かなければなりません。自分を確立し、どんな価値観をもって生活していくか考える材料を得られる研修の機会を大学に求めているのではないのでしょうか。教師としての自分を見つめなおし、これから教師としていかに生きていくかといった、ふだんなかなか考える機会がない内容のことを考え直す場として、これから大学で行われる現職講座が位置づけられていくことが求められていると思います。

こさか ふみのり（本学大学院生 臨床教育学実践学専攻）
写真提供・高部剛



現職教員教育講座受講の様子

Q-Uを使った学級経営セミナーのグループ討論 (デジタルビデオ映像より)



四月にスタートした「地域教育相談室」の活動も一年間が過ぎようとしています。現在までのところ全相談件数はのべ五四件、そのうち電話・ファクス・電子メールによる相談件数はのべ三三件、来室による相談件数はのべ九件、訪問による相談や講演の件数はのべ一二件です。内容としては、学級経営や学級集団の育成、授業に関する相談が三五件と最も多く、次いで学校不応答や非行問題への対応についての相談が一〇件とつづきます。さらにADHDなどの軽度発達障害をもつ児童生徒への対応についての相談四件、校内研究に関わる相談が五件となっています。この一年間に相談室で対応した相談は、件数こそさほど多くはありませんが、その内容は多岐にわたっています。学校現場の先生方が多様な問題に直面し、その対応についても考えたり、専門領域からのアドバイスを求めたりする支援の要請があることがうかがわれました。

学級経営に関する相談の内容としては、学級の問題をどう解決していくか、学級を教育力のある集団に育てていくにはどうしたらよいかという具体的な対応についてのものが多くなっています。相談の中では、質問紙尺度「Q-U」(本学河村茂雄教授開発・図書文化社)による学級集団の状態の評価にもとづき、児童生徒の相互の関係を生かした人間関係づくりのなかで問題を解決していくための手だてについて、ともに考えています。最近では、不登校、非行、LD、ADHDなどもつ子どものいる学級でどう学級経営を進めていけばよいかという相談もあり、問題や困難を抱える児童生徒個々への対応だけでなく、児童生徒が所属する学級集団とのかわ

地域教育相談室の一年を振り返って

粕谷貴志

相談の受付、その他お問い合わせは、
地域交流センター教育相談部
Tel&Fax: 0554-45-2411
e-mail: kysoudan@tsuru.ac.jp
月曜日から土曜日の10時から17時。
ただし、受付は大学の授業開講期間に限ります。

りの中でどう援助を進めていくかという視点の必要性も感じています。「心の教育」が叫ばれるようになって久しいわけですが、そのための方法を見出すことはなかなか難しい現実があります。その中で現場の先生方は、学級経営や教育力のある学級集団育成のために、より具体的な方法を求めていると感じています。

また、最近では学級崩壊に悩む先生からの相談のケースもあります。教職経験の長いベテランの先生の学級でも学級経営がうまくいかなくなるケースがあり、現代の子どもたちと子ども集団の変化が映し出されているように思います。これらの問題への支援では、とくに学級集団の状態の把握にもとづいた具体的な次の一手となる方法が必要とされます。学校現場へのサポートをするための視点として、情報提供だけでなく教育実践で活かせる具体的なサポートが求められていると感じます。相談室では、相談事例の積み重ねや、研究で得られた知見を生かして、問題の予防や解決につながる対応策を蓄積していくことが必要とされていると感じています。

地域教育相談室では、相談活動以外にも公開講座として「Q-Uを使った学級経営セミナー」(五月・二月)、「LD、ADHDの子どもとその指導のあり方を考える」(一〇月・十二月・二月)を開催しました。県内の小中学校・高校関係者をはじめとして、幼児教育関係者、保護者、学生など、のべ二〇〇人をこえる参加者があり、それぞれの領域への関心の高さがうかがわれました。地域教育相談部の活動としては、このような教育現場の先生方の求めに合ったテーマで、研究から得られた知見を提供

していくことが求められていると感じています。多忙化に拍車がかかる学校現場で実践されている先生方に、いかに教育実践に生かせる内容を提供していくことができるかが課題であると思います。

そのほかにも教育相談室では、校内研究のサポートもおこなってきました。具体的には、校内研究のテーマに関わる理論についての情報提供、研究の計画や方法についてのアドバイス、実践の効果測定や調査結果の統計処理、分析などです。より確かな実践をと向上を求める先生方の意欲に応える支援であるといえるでしょう。大学が研究機能を生かして支援ができる部分であると感じるとともに、教育実践を現場の先生方とともに考えていく貴重な機会であると考えています。

スタートしてまだ一年の地域教育相談室ですが、これまでの活動を通じて、相談室の今後の課題を次のように考えています。

- 一・学校現場で問題を抱えて悩んでいる先生方への有効な支援につながる具体的な援助資源をもつこと
- 二・現場の声に応え教育実践に生かせる情報をタイムリーに提供していくこと
- 三・学校現場の研究活動をサポートしながら教育実践の向上のためにともに研究していくこと

今後も相談室では、教育相談室内の活動や研究から得られた知見を蓄積し、それらを少しでも学校現場の先生方の支援することに役立つように還元していく活動をしていきたいと考えています。

かすや たかし (本学非常勤講師)



2004年2月14日、Q-Uを使った学級経営セミナーの様子

社会教育施設「国立中央青年の家」の専門職員のところ。世界の小学生たちといっしょに



都留文科大学の新しい動きに期待する

勝俣武男

地域交流研究センターのこの機関誌には、都留文科大学の卒業生で都留の地域で仕事をされている方々に登場していただきたいと考えています。今回は、現在、地元の東桂中学校の校長として教育の仕事に携わっておられる、勝俣武男さんにお話を伺いました。

都留に生まれ、都留で育つ

私は、昭和一九年に都留市で生まれ、都留市で育ったんです。大学に入ったのが昭和三八年だったかな。私が入学した頃は都留市役所だった跡地に木造校舎があった。思い出すのは、夜のピアノの練習。初等教育でしたから、練習する場所とピアノの台数が無いから、大勢の学生がプレハブの建物に殺到して、夜中の列車で帰ったっていうことがよくありましたね。三年だか四年のころ新校舎へ移りましたが、まだこの本館一つしかなく、グラウンドは整備されていなくて石拾いしたりした。当時は、学生のストライキがあって*授業が何ヶ月もなかった。その時は、アルバイトをしていました。授業にはあまり出なかったですね。「代返」をよくやっていましたから。あんまりいい学生じゃあなかったな。

教育現場で働き続けて

卒業してすぐに小学校の教員になって、二十年ほど富士吉田市に勤めました。その後は、御殿場にある文部省の社会教育施設の「国立中央青年の家」の専門職員として、三年間働きました。そこでは、社会教育施設でしたから、企業の研修、大学生の研修、少年院の職員の研修など、いろいろなことをやりました。

かく大事に扱う、誠心誠意を込めて、これ以上できないという位の気持ちで接するというのがやっぱり大事なことだと思ふようになりましたね。いい経験をさせてもらいました。

最近の都留文科大学の動きへの期待

地域交流研究センターっていうのが立ち上がったという話を聞いてね、ああこりや、地域に密接した大学のほうへ近づいていくことになって良かったなと率直に思いました。生涯学習の観点からみて、年寄りも年寄りなりに、子どもも子どもなりに、学生は学生なりに、教師は教師なりに、あらゆる市民と一緒に交流し学ぶことが必要で、こういうものができたっていうのはものすごく嬉しかった。

それから、臨床教育実践学専攻という大学院ができたのも、学校の教師も「心」の問題とかで悩んでいるので、嬉しかったですね。今、現場の校長をしていて、田中先生や森先生と出会うと、校内研究会と一緒に研究する機会ができて、職員の新しい学びが始まって・・・それは当然子どもにも還元されていくと思ふています。

また、「放課後チャーター制度」が試みに始まって、学生や大学院生がうちの学校へ来て、生徒と直接に遊んだり学んだりするなかで、いろいろな学んでくれる

まあ私は小学校教員でしたから、例えば世界三五カ国の小学校五年生八〇名、日本の小学校五〇名と一ヶ月一緒に暮らした経験もあるんですよ。これは、人間を変えられたというか、すごくいい経験でしたね。

それで、平成元年に、谷村第一小へ戻ったんですよ。初めて都留市の小学校に勤めることになりました。そこで三年間。それから、二年、社会教育主事として働きました。その後は、東桂小学校の教頭ということで二年間。そして今度は校長ということで、初めて着任したのが河口湖の勝山中学校でした。

小学校の教師の経験が長いんですよ。どちらかというと、小学校の教員は生徒一人一人を丁寧に見ることが多い。中学校では、体も大きいし、生徒を大雑把に見てしまうくらいがある。そういう点では、やっぱり小学校を長く経験できたのが良かったなと思います。

貴重だった社会教育施設での経験

それから、社会教育施設で働くなかで、企業の研修を見ていて、お客さんを徹底して大事にするということを学んだような気がします。それまでは、教師だから、えばっちゃって、教えてあげるなんて言っちゃって来たけど、そこところが大きく変えられましたね。子どもを

ようになってきたのも大変嬉しいことです。

それから、図書館が新しくオープンするそうですね。図書館の機能と地域交流研究センターの機能が一緒になったという活動ができる、地域住民と大学との関係がなお広がっていくのではないかなと期待しています。やっぱり図書館というのは文化のパロメーターで、図書館をどういうふうな地域に開くか、これは鍵だと思ふんですよ。大学の図書館だから学問研究に学生や教授が使う。これは当然のこと、それ以外に地域の住民や子どもや教師がいかに図書館を活用して自分の学びを深めるか、そのことに役立つ開かれた大学図書館であってほしいですね。

私は、同窓会の仕事などもしていますから、こういう動きをバックアップしていきたいですね。

かつまた たけお

東桂中学校校長 現都留文科大学同窓会会長



*日本の「大学の自治」の歴史に名を残す事件となる。
 (『都留文科大学創立五十年記念誌』2004.2.14 を参照)

甲斐の文化の香り

楠元六男

甲州俳壇の見渡し

山梨県都留市という土地において、これまでいかなる文化活動が展開されていたのかは、まだまだ不明のところが多い。かつて『都留市史』が出版された折も、文化面は手薄でござりな状況のまま放置されてしまった。いわゆる歴史方面からの文書類の整理はなされたのだが、文化・文学面に関しては一顧だにされていない。こうした市史類の場合、悉皆（しつぱい）調査（完全な調査）が求められるものであろうが、一面からのみの整理になってしまったのは残念というしかない。ではあるが、歴史的観点から、もろもろの資料が整理されたのは、それはそれで我々にとって有難いことであった。

さて、歴史分野や文学分野で「悉皆調査」という言葉があるが、そこに存在するすべての資料に目を通すということである。その意味において、山梨県の場合、文化面における悉皆調査はどの分野においても不十分という結論をもたざるをえない。ある機関が企画をたてて、若干の予算で対応すればすむというレベルの問題ではない。かなりの年限と長期的展望のもとに、毎年企画が積み重ねられて、はじめて可能な事業だと思われるからである。都留市にはすばらしい文化の歴史がある。しかし、その具体的調査に関しては、不十分といわなければならない。

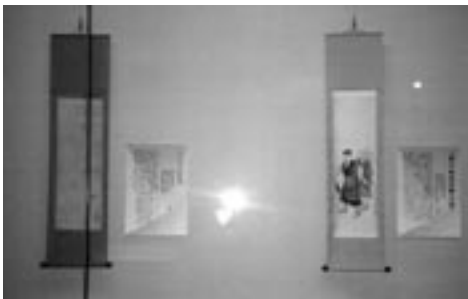
●芭蕉と麁時との関係―その背後にあるもの

天和三年（一六八三）夏に松尾芭蕉は、確かに甲州谷村を訪問している。しかし、「なぜあの芭蕉が谷村に来たの」という疑問は、きわめて自然で根源的なものといえる。こんな基本的な疑問に、我々は答えられているのだろうか。自問自答したとき、薄ら寒いものを感じてしまう現状なのである。

江戸時代に俳諧という庶民的な文芸が発生してきた。主に貴族たちの文学表現といえる「和歌」に対して、本当に庶民的な「俳諧」が世の中を席卷しだすが、江戸時代である。わずか十七音からなるこの文芸形態は、あつという間に庶民の心を捉えたのであった。

とはいえ、俳諧の原初的流行は、京都を中心とする地域から、伊勢や大坂（江戸時代においてはこのように表記する）あたりに集中する傾向があった。やがて俳諧は全国に流布していくのだが、甲斐国に浸透していくのは他の土地とくらべて若干遅い。

江戸時代がはじまってから七十年ぐらいが経過し、ようやく俳壇も複雑になっていく。俳壇の権威をほしいままにした松永貞徳



芭蕉関係軸もの

かく批判的な物言いを披露する背後から、俳諧関係では芭蕉の谷村来訪のことに関して、これまでも調査がなされてきたとの意見が投げかけられる可能性もある。そういう方向からの意見そのものが、根本的な誤解なのである。なぜならば、一地域の俳人をいかに大きくみせても、それは正解とはならないからである。大きな歴史的視点から見渡してはじめて、一地域の状況は鮮明になってくる。つまり甲斐俳壇史の全体的な完成がない限り、正確な位置づけなどできない相談なのである。

そんなわけで、テキストそのものが不完全であったり、きわめて任意の興味によって言及されてきた経緯がある。この曖昧さを、若干でも救ったのは、平成十二年にミュージアム都留で開催された『芭蕉・旅・甲州』（ミュージアム都留）展であった。あやしげな資料のすべてを排除して、確実な事実のみで組み立てたはじめての芭蕉と麁時の研究書といえる。

を中心とした貞門派に対して、西山宗因を中心にした談林派が登場してくることに、派閥抗争が表面化していく。貞門・談林の間で応酬された論争は両派を疲弊させ、やがて俳壇に沈滞感が漂うようになる。

以上のような状況をうけて、天和期（一六八一〜八三）のころになると江戸を中心にして、第三の勢力が登場してくる。一般には芭蕉を中心とする蕉門に焦点を定めがちであるが、実際はもっと多様で、調和一派ほかさまざまな連中が活躍していたと把握しておいた方がよい。

●甲斐俳壇を支える都市俳人との関係

天和から貞享年間にかけて、西暦でいうと一六八〇年代のことになるが、甲斐は二つの都市俳人の勢力下にあった。国中地域の人々は岸本調和に指導をおおぎ、郡内では秋元家の家老・高山麁時が芭蕉に指導をおおいだのである。この両者のあり方は、江戸における交流から出発したのだと考えられる。ちなみに、深川の芭蕉庵と秋元家の江戸藩邸（中屋敷だと思われる）とは隅田川をはさんで近かった。そこから芭蕉・麁時の交流が可能になったと想像される。

対して、岸本調和の方には国中の一ノ瀬調実が積極的にコンタクトしていき、いわゆる加點俳諧をベースとした広がりのある交流が展開していく。

以上、国中と郡内における江戸俳人とのコンタクトのあり方を、整理してきた。指導者と受講者とのあり方の違いは、形態上の違いにとどまらず作品の内容にも波及するものである。より個人的な芭蕉と麁時との関係に対して、調和とその他多数との関係は、作品のあり方にも影響していく。

この点を無視して、芭蕉と麁時との関わりを平板に説いても、ほとんど意味はない。芭蕉のもっとも古い書簡は麁時宛書簡であるが、そこに開陳されている指導の厳しさは驚くほどのものである。もはや点者であることを拒否した芭蕉は、麁時の作品を忌憚なく批評している。

対して、調和の方は、より多くの甲州俳人と交流しつつ、最古の甲州俳書『白根嶽』を出版するに至る。調和の理想とするところは、俳壇における実績の方であり、作品の鍛錬ではなかった。同時代的にみれば、調和の活動の方が実績を伴っているだけに派手であった。対して芭蕉の方は、実に地味で実績を伴わない個人的な関係に終始するだけのものであった。

歴史は不思議なもので、調和の活動の方が忘れられ、芭蕉の足跡は今もって注目されているのである。近代人のパースペクティブな見方は、調和の活動を葬りさり、芭蕉の活動をより鮮明にクローズアップしていったのである。そこに潜む原理は、私たちに文学史の原理が、かならずしも同時代的な軽重の判断に準拠していないことを教えてくれよう。

● 多様な山梨の俳人たち ●

さて、芭蕉と麁時のことにこれまで触れてきたが、それはわずか十年たらずの交流であった。さほどに麁時は多忙であった。ありていと言えば、仕事の方が忙しくて、俳諧などに興じている場合ではなかったのである。

甥とも伝えられる黒露の存在は、甲州における俳諧と密接に関係していく。その経緯を簡単に説明しておきたい。

黒露は素堂の甥と紹介しておいたのだが、実際の関係は不明というしかない。葛飾派の面々は、黒露を「素堂の兄弟が使用していた下僕の子供」と紹介している（『連俳睦百韻』等参照）。

黒露は、甲州俳諧を考える上で重要な存在といえる。江戸で笠屋という米屋の養子になった黒露（当時は雁山と号していた）であるが、放蕩のためにお店を破産させてしまうのである。もはや江戸に居住できなくなつてしまつた黒露は、享保十三年頃に江戸から逃亡してしまふ。約十年近く放浪したのちに甲州にひよつこりと現れる。

以後、黒露は駿河と甲州とを往き来しながら生活していく。享保二十年以降、甲州を地盤として、江戸俳人と交流していく。

当時の江戸では、俳壇そのものが大きく変容しつつあった。芭蕉の弟子の宝井其角を源流とする「江戸座」が迷走しつつあり、素人集団が芭蕉風を提唱している時代であった。本来、同根である筈のこの両派は対立しながら、大きな時代の変動を演出しつつあった。要するに「江戸座」から「蕉風復古運動」へと論理は変動していく状況にあった。

この変動の中で、「蕉風復古」をもっとも尖鋭的に主張していたのが、素人武士集団が主導権をにぎる『五色墨』の面々であった。黒露は、この面々と親交を結びつつ、甲州に地盤をひろげていくのである。かくして江戸の葛飾派とは異なる流れとして、甲州に葛飾派亜流が成立する。

● 甲州俳壇の新たな展開 ●

黒露は甲州に門弟を擁し、独自の活動を推進していった。しか



市民講座の様子

ミュージアム都留における素堂展



素堂筆卷子



視点を変えて山梨全体を俯瞰してみると、国中の山口素堂は、江戸時代におけるスーパー・スターと把握しておいてもよい。若くして甲州を去り、江戸に居をかまえるのであるが、芭蕉の友人として、隠者として、独特の生き方を実践する。蕉門俳人ではないのだが、芭蕉と同格の立場にたちながら、蕉門の周辺で独自の活動を展開させていく。素堂は葛飾に住んでいたため、素堂の系統に位置する連中を、後に「葛飾派」と呼ぶ。現在『葛飾蕉門分脈系図』とか『葛飾正統図』とか呼ばれる派閥の系統図が残されているが、これは江戸時代の中にあつて貴重な系統図であり、派閥というものの実態を伝える数少ない歴史資料でもある。

葛飾派に甲州俳人がたくさん所属しているとはいわない。しかし、江戸を地盤とした武家中心の特殊集団であることは、俳諧史においては周知のことに属する。

葛飾派に甲州俳人は多くないが、この一派は明らかに甲州に大きな影響を与えていくのである。この一派の活動が、多くの甲州人を俳諧に誘っていく。

● 葛飾派の二系統 ●

山口素堂なきあと（素堂は享保元年に他界する）、甲州俳人たちは一時期「江戸座」俳人の指導をおおぐことになる。しかし、「江戸座」俳諧はあまり甲州に浸透することはなく、やがて葛飾派の影響下のもとに展開していくことになる。

さて、葛飾派は基本的に江戸で展開していく。その中で素堂の

しそこに『五色墨』一派の連中が入りこんでくる。珪琳・宗瑞そして柳居という面々に従う甲州俳人も出てくるのである。こうした動向の中にあつても、黒露とその一派の連中は、地盤を着実に構築していく。

やがて黒露の興味は江戸葛飾の方へと傾斜していく。黒露が指導する場所は、甲州・駿河・江戸の三地点となり、甲州はないがしろにされる傾向にあつた。黒露他界（明和二年）の後、柳居の門人の門瑟に指導仰いだ上矢敲氷が甲州俳壇を席巻していく。この敲氷という存在が、後の都留の俳諧を考える上で、重要な存在となっていく。

幕末俳壇を考える上で、もうひとりの重要人物が五味可都里である。藤田村の庄屋までつとめた可都里は、金沢から高桑蘭更をむかえ、名古屋の加藤暁台の指導も仰いだのであった。諸俳人の到来を誘い、かつ新しい論理で俳諧活動を展開した。辻嵐外らも甲州に定住するようになる。

幕末時代を考えると、敲氷と可都里とは、甲州俳壇を支えた両車輪といえる。

● 都留の俳人たち ●

都留の俳諧活動は、麁時の時代から大きくとんで、幕末まで下る。『水面鏡九十四人集』を編集した連水は敲氷の門弟である。基本的に幕末の都留で俳諧活動に勤しんだものたちは、敲氷の手ほどきを受けたものと考えてよいのである。敲氷の方が宗匠としての活動をしており、可都里の方はどちらかというと趣味的側面のつよい活動を推進していたからであろう。

地域に根ざす大学と博物館

●文化事業の困難さ

俳諧活動一つをとってみても、多彩な資料群の集積を展望するのはむづかしい。駆け足で、しかもディテールを省略した記述を試みてみても、俳壇全体を俯瞰することの困難さを再確認するだけである。こうした作業はこれまで放置されているにもかかわらず、文化的な香りだけを匂わず言辭が発せられてきた。

ちなみにミュージアム都留で毎年冬にうたれる展示をみても、一般市民がどの程度の興味を示すのかという点、あまり積極的に関わってはこない。ごく一部の人が関係してくるだけである。地域交流という言葉の「交流」は、一方通行になる危険性を多々孕んでいると考えてよい。

都留のことは都留市民が解明した方がよいのではないか。地域交流センターは、そうした努力を手助けする機関であるべきだと思っている。大学は、あるスキルなり情報を授ける機関ではあるまい。もはや地域と協力する機関であり、使われるべき機関であると思っている。その意味において、たなぼた式に大学に情報提供を求める博物館では、将来はない。より積極的に自分たちが解明する手助けを大学に求めるべきであるし、そうした能力すら持たない博物館なら、その存在意義自身が問われるべきかと考える。

●俳句の館・風生庵

文学系の博物館を考えると、いつも思い出すのは、都留市に近い山中湖村の文学館である。山中湖村は、すでに三島由紀夫や徳富蘇峰の記念館を持っており、平成十五年秋には富安風生にち



風生庵の間取り図

なむ「俳句の館・風生庵」を公開している。なぜ山中湖村の文化事業を高く評価するのかというと、これまでの経験を生かして工夫を重ねていると判断できるからである。例えば博物館とは、一般の人が遊ぶところであり、やたら重い情報を提供するところではなさそうである。基本的に考えて、博物館はプレイ・ランドとしての機能を有しているべきであり、建物そのものがその自治体の見識を示す存在だと言っただけである。この意味において、「俳句の館・風生庵」は理想的な作りだといえる。民家を移築した結構に茶席すら設け、博物館にありがちな威圧感を与えないからである。一般の人がふらりと近づき、建物と遊ぶことのできる構造である。大して大きな建物ではないのだが、その小ささを利用したうまい作りだといえる。

●文化事業の将来

現代社会において、文化事業はどんな意味を持っているのだろうか。文化系大学が抱え込んでいる問題と、かなり近いものがあるように思う。ともすると質の高さが求められそうだが、そこに絶対的な意味があるのかどうかは検討せられるべきであろう。なぜかとも曖昧な表現をするのかというと、質の高さは誰もみないかぎり意味がないと思うからである。

博物館における文化事業は、質の高さと面白さが共存していなければならぬ。その意味において、さらなる工夫が、我々には求められているということを確認して、本報告を終了したいと思ふ。

くすもと むつお (本学国文学科教員)
21頁写真・北垣憲仁



写真上：風生庵の内部
写真左下：山中湖畔のなだらかな丘陵地にある風生庵
写真右下：庭からのぞむ風生庵



「ミニミュージアム都留」に就職して一年半が過ぎました。都留市はその昔城下町として栄え、山梨県東部地域の政治・経済・文化の中心として発展してきました。「ミュージアム都留」は、そんな歴史ある「都留の宝」を展示、紹介致しております。私自身、都留で生まれ育ったにも関わらず知らない事が多く、故郷都留にはこんなに素晴らしい歴史があるということを実感しています。毎回そんな都留市の文化、歴史、人物を企画展・特別展を通し皆様にご紹介致しております。毎回特色ある内容にとスタッフと忙しく準備を進めております。限られた人数ではありませんが、地域や市民に親しんで頂けるよう歩みを止めず、地道な努力をしていこうと思っております。

さて、 博物館とはいったいどのような機能をもつ施設なのでしょう。その原点に戻って考えてみると、博物館には資料の収集・保管、資料の公開・活用、調査研究、教育普及の四つの大きな基本的な機能をもっています。

資料と は博物館資料のことで、端的に言えば文化財、県や市に指定されているものを想像される場合が多いかと思いますが、しかし、文化財とは人の歴史や文化において構築された文物すべてに当てはまる言葉なのです。文化財は人類にとってかけがえのない貴重な財産です。博物館での資料の収集・保管は、将来の人々に貴重な文化遺産を継承していくための活動です。

資料の 公開・活用は、利用者が最も関係する展示のことを指します。貴重な資料を、ただ保管しているだけではその重要性や価値が認識されませ

「ミニミュージアム都留」にお越し頂けたらと思います。

これまで で開催された展示の具体を、若干紹介しは、開館一周年特別展として「芭蕉・旅・甲州」をうちました。従来混濁していた資料の群れを整理して、これだけは確実という資料で展示しております。多くの人に見学いただき、東京やその他の地域からもお出かけいただきました。もはや図録は売り切れています。いまだに問い合わせの多い企画でした。平成十三年冬には、常設展として、山口黒露展が開催されています。甲州に葛飾派を導入した重要な人物ですが、その出自や活動の具体は、あまり明確になっていません。本企画におきましては、都留文科大学の近世ゼミの方にもお世話になりました。丁寧な資料調査を背景にした研究書が近世ゼミから出版されると仄聞しております。元禄末から享保俳壇に確実な足跡を残した黒露の全貌が、世に公表されることを期待してやみません。平成十四年冬には同じく常設展として、石牙・漫々親子に関する展示がうたれました。この親子は、甲州に遠隔地の俳人を誘う意味において、大変重要な存在であると聞いております。さらなる資料の涉獵と本格的な調査が及ぶことを期待しております。今平成十五年冬には企画展として、山口素堂に関する展示がなされました。従来より甲州出身の俳人としては別格の存在として知られていますが、私ども郷土の偉人を知る上でも、貴重な展示だったと思います。葛飾あたりに住んで、隠逸生活を享受した素堂の魅力が明らかになったかと思えます。以上、楠元六男氏の監修になる展示を追いかけましたが、いずれも甲州にとつては大切な企画であったと思います。他に、関戸健吾さんのコレクションが、平成十四年春には開催されていますが、

多くの方に親しまれる博物館を目指して

伊藤理恵

ん。文化財の保存と活用を両立するためには、展示による資料の劣化の防止のために、私たち学芸員が工夫を凝らさなければなりません。

調査・ 研究では、都留市の歴史に関する研究を主体に、成果を展示に反映させています。

教育普 及は、展示（特別展・企画展）ごとに、関連する講座や体験教室を開催して、利用者の理解を深めることに努めています。博物館のもつ機能をそれぞれ単独で活動させていくのではなく、複合的に作用させて利用者に還元していくことが重要であると考えております。

博物館 活動を通じて私が最も苦慮していること歴史文化、文化財保護の理念などへの理解を深めて行くことの難しさです。博物館だけが活動を積極的に展開しても、市民の同調が得られなければ活動は空転してしまい、事業として失敗してしまいます。博物館の敷居の高さを感じさせない気軽で簡単に利用できるように改善して行くことが当面の課題であると思います。市民の意識の中に博物館が根付いてくれる日が来ることを願ってやみません。

今年は 市制五〇周年の年であり秋には江戸時代都留市にスポットを当て、都留市にまつわる文化的遺産、谷村藩に関する貴重な歴史的資料を一同に集め、市制五〇周年にふさわしい特別展を開催します。また、恒例企画となりました「甲州俳諧展」では、楠元六男氏（都留文科大教員）にご指導を頂き、貴重な資料を都留市で展示・紹介し毎回大勢の都留文科大学の学生さんにも鑑賞して頂いております。今後も学生の皆さんにも気軽に「ミュー

こちらは一地方都市では見ることでできないレベルのものが展示されました。ことに文房具の紹介などは、東京国立博物館の展示よりよかつたのではないかと判断しております。

以上、 粗雑ながら、これまででの展示の一部を紹介してきました。いずれにせよ、衆目をあつめる展示の企画を推進するためには、それなりの経済的背景が必要となります。しかし、私どもの博物館の規模では、なかなかそれはままなりません。大胆な企画と魅力的内容を具体化するためには、私どもの方の努力も必要となります。そのためには、都留文科大学の所有する人的財産をいかに活用していくのが、私どもに肝要なことかと思われま

「ミニ ュージアム都留」と都留文科大は、ともに都留市の機関であります。両者が別々に活動して行くこととどまらず、今後は協調しながら研究成果を相互に活用して行くことが私の掲げている理想です。例えば、大学のプロジェクトチームの研究成果をもとに展覧会を構成することも不可能ではありません。また、学芸員を志す学生が博物館の基本理念を学ぶために「ミュージアム都留」の実務を視察し見学することも、大きな意義があると思います。研究機関が相互に手を組むことにより、それまでとは違った領域での活動ができるはずです。

私の博 物館での活動について、経験や基本理念、今後の展望について述べてきましたが、博物館の果たす使命は無限大に広がり、絶える事がないと思えます。新たなことへの挑戦心と好奇心を忘れずに今後も学芸員の職務をこなしていきたいと思

夏休みチャレンジ教室「屋台づくり」



「印章づくり教室」



相談室の 一年間にも おもよう

この一年間、大々的なPRをしないにもかかわらず、相談室に寄せられる相談は、かなりの件数に上っている(具体的な内容は、粕谷先生の報告を参照してください)。

私が述べたいのは、都留文科大学の相談室に寄せられる相談は、都留市近辺、山梨県内だけではない、ということ。まさに日本全国なのです(とくに関東圏、関西圏などの、都市化の進んだ地域で実践されている先生方が顕著に多くあります)。そして、相談室が実施する公開講座にも、東北や西日本の先生方も参加してくれています。職種は、学校の教員が圧倒的に多く、あとは教育委員会関係の方です。

当然、遠方のクライアアントの相談形式は、電話、メール、

ファックスが中心になります。が、なかにはわざわざ本学までみえられる方も少なくありません。それほど、現在の日本の学校現場は深刻な問題を抱えているのだと、あらためて実感するしだいです。

本学は日本全国から学生を集め、そして、日本全国に教員を送り出している実績があります。したがって、本学にある相談室も、地域に根ざしながらも、いろいろな形で、都留から全国に発信できる、そういう面を大事にしたいと考えています。しかし、いかんせん、予算とスタッフの少なさに、悩まされる日々です。

河村茂雄(本学初等教育学科教員)

センター 事務局の 一年

四月から地域交流研究センターの事務局を担当してきまし

たが、早くも一年が経過しようとしています。地域と大学をつなぐ窓口的な役割ということで、地域の要望にどんな対応ができるのか、期待と不安が交錯するスタートでした。

事務局が主にかかわったのは、講演会・講習会等の講師派遣要請への対応でした。最終的には一八団体二五回、延べ二九人の先生に引き受けていただきました。派遣先は県外二件の他、小・中・高校、市・県関係の機関等で、内容についていえば、環境、ボランティア関係など多岐にわたります。これらの中には、学校林を活用した地域の活性化への助言依頼などもありました。

一年を振り返ってみますと、コーディネーター的な役割を果たすことができ、それなりの交流のサポートができたと思っはいますが、多くの課題も残りました。とくに講師となる先生方との連絡及び日程調整に意外と時間がかかること、また、時間的に余裕のない派遣要請もあり、対応に苦慮したこともあり

ました。先生方からは、半年ぐらい前に話があり、できれば企画段階からかわりを持ってれば充実した講演会等の開催ができるのに残念だとの意見も多数ありました。

何かと課題のあつた一年間ではありましたが、大学と地域のかかわりの重要性を改めて認識したしだいです。人口三万人の地方都市が運営する大学という本学の特色をいかした、独自の地域貢献はいろいろあると考えられます。今後も地域交流研究センターの発展を側面から支えていきたいと思っております。

園田一二(学生課長)



「総合的な学習 の時間」を どう生かすか

地域総合学習開発プロジェクトの一年をふりかえって

「総合学習」の可能性を探る

いま教育改革の柱として打ち出されている諸施策は、「総合的な学習の時間」の推進から反転して「基礎・基本」の刻み込みや「習熟度別学級編成」など、「学力低下への対応」に焦点づけられています。学校現場でもこうした上からの圧力と、「百

ます計算」ブームに乗じた商業主義的な「学力低下キャンペーン」のなかで、それに何とか対応しなければという雰囲気の一部に、しかしかなりはつきりと生まれてきています。いくつかの学校や地域では「総合的な学習の時間」を、算数・数学の基礎練習の時間にあてるなど、本来のあり方から逸脱した現象も見られるようになりました。

「百ます計算」をはじめとした反復練習や、意味の理解よりも解き方を重視する授業は、たしかに一時的には成果も見えやすいかもしれません。しかし、こうした「基礎・基本の刻み込み」では、学ぶ主体であるはずの子どもの内面はほとんど無視されており、それぞれの学習が子どもにとってなぜ必要なのかという意味の探求に向かうことさえありません。私たちは「総合的な学習の時間」を、単に環境や国際理解のための知識を増やすためのものではなく、学習の本質とはなにかをあらためて問い直す可能性をもつものとして解しています。

都留の地から発信する

こうした理論を裏付けるためにも、それ以上に、「教育現場」に実践的な提案をしていくためにも、今年度の「地域総合学習開発プロジェクト」では、都留市内各小・中学校にお願いして、各校で展開されている「総合的な学習の時間」の計画や実践の記録を集め、整理をしてみました。

一年を振り返って



都留市の「総合的な学習の時間」では、本来の趣旨にそつて

の活動が豊かに展開されていますが、現時点での「中間まとめ」としては、(これは都留だけに限ったことではないのですが)、各学校の取り組みで教師が担わなければならないという意識がややつよいように思われます。もつと、地域の人々に依拠したり、子どもの自由な発想に思い

切つて任せてみるような試みができる

と楽しいだろうなど感じているところです。そのためには、各学校が共同利用できるように地域の「教育資源」をもつと見える形でネットワーク化していくことや、ゲスト・ティーチャーとの共同研究を含んだ授

業づくりの発想も取り入れるこ

となど必要なのかもしれない。私たちのプロジェクトも、それに少しでも貢献できれば、と思っております。

佐藤隆(本学初等教育学科教員)

地域の声

voice

地域交流研究センターに 寄せる期待

こんにちは 社協です！

都留市社会福祉協議会は、都留市保健福祉センターいきいきプラザ都留の一階にあります。ボランティア活動の推進をその重要な仕事のひとつとしてボランティアセンターを設置し「いつでもどこでもだれでもボランティア活動に参加できる環境づくり」を目標に、意識啓発ときっかけづくり、活動支援ネットワークの整備、基盤の整備という四点を具体的な事業内容の柱として、日々ボランティア活動の推進にあたっています。

都留文科大学の学生も、個人で、グループで、また既存のグ

ループや団体に所属して活動するなど多様な活動形態でボランティア活動に参加し、地域社会と交流してきました。しかし、「ボランティアに関心はあるけれどきっかけがない」「ボランティアセンターが遠くて行きづらい」という学生の声もよく聞かれます。

ボランティアセンター機能の一つとして、ボランティア相談・援助、登録、斡旋があります。ボランティアへの意欲を実際の活動に反映させるためには、学生の側にたった支援策を構築することが重要です。もつと積極的に大学と連携を図っていきたくと考えていた矢先、都留文科大学地域交流研究センターから「学生にとって身近な構内に向いてボランティア登録受付をして欲しい」とのお話をいただき、昨年七月一七日（木）、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会ボランティアセンター共催によりボランティア登録説明会を開催し、その後二日間校内でボランティア登録を受け付けました。

説明会には一一名の学生が参

トピックス

地域に開かれた図書館を ー新図書館いよいよオープンー

本学にとって長年の懸案であった新図書館が完成しました。現在、四月開館に向けて準備が進められています。新図書館構想の具体的検討は一九九六年度に開始されました。調査活動と審議の結果は『新図書館建設基本構想』（二〇〇〇年四月）にまとめられ、そのコンセプトが建築設計に反映されました。大学図書館の基本的役割は学生の学習・研究の支援にあります。その充実のために、旧図書館に比して三倍以上の図書収容可能冊数と学習閲覧席が確保されています。同時に、読書・情報検索・AV利用・談話のためのさまざまなコーナーを利用者の多様な知的活動と憩いや交流の



開館準備の整った新図書館



エクステリアは自然との交流の場

場として配置しています。北側のエクステリアには、蝶やトンボが集まる樹種を植栽し池を組み合わせた「ピオトープ」（生態園）が造られ、本学におけるフィールドミュージアムの一部として活用されることになっています。

新図書館構想における重要な柱は、「図書館の公開・地域開放」ということです。これは「図書館に保有される情報は根本的には人類の共有資源であり、すべての人がその資源を利用する権

加されました。ボランティア登録状況は、三日間で延べ九名でした。少ないようですが、それ以前の過去五年間に直接窓口に来所し登録された学生の数は、延べ四三名です。わずか三日間で延べ九名登録された実績から、学生のボランティア活動が促進される確かな手ごたえを実感しました。

今後は、個々の興味に応じて多彩なボランティア活動を展開できるように学生の意欲と自由な創造力をかきたてるような支援のあり方を追求していきたいと考えています。校内におけるボランティア活動の情報提供・相



私たちのまちのボランティア情報

利を有する」という「資源共有」の理念に基づくものです。この方向の実践として、二〇〇二年より都留市立図書館との連携を進めるための連絡協議会を発足させ、市民と大学の貸出カードの共通利用・市立図書館の窓口における大学図書館資料の貸出・横断検索の実現等、市民が大学図書館を利用しやすい条件を整備しました。

このような図書館相互協力の最近の動きとして注目すべきことは、市立図書館が取り組みつつある学校図書館とのネットワークづくりです。先日、市立図書館協議会によって視察研修が行われた千葉県袖ヶ浦市では、公共図書館と学校図書館を結んで、図書の流通システムを含むネットワークが作られています。また、全小中学校の図書館には市独自雇用の読書指導員が配置され、このネットワークを支えています。都留市においても検討されるべき方向性を示すものであり、その中で本学図書館の果たすべき役割を考えていきたいと思えます。

山本安夫（本学図書館長）

談話の充実など現状の課題検討、さらに、学生が単にボランティア活動に参加するだけでなく、一緒に活動する学生たちをサポートできる人材育成プログラムの企画など、地域交流研究センターとの連携を強化し、具現化していきたいと思えます。

森嶋美子 都留市社会福祉協議会
地域福祉活動コーディネーター
都留市社会福祉協議会
Tel:0574-46-5115 E-mail:tsuru-voice@ccs.com.jp

地域教育推進の立場から

教育事務所の地域教育推進重点は、子どもを育てやすい状況、子どもの育ちやすい環境をいかにコーディネートするか、ということに尽きる。「子どもたちの好ましい成長を図るために、人と人との結びつき、人と組織との結びつき、組織と組織との結びつきをコーディネートすることによって地域の持つ教育力を高めていく」という一点である。そのために、あらゆる層を結集し、地域教育推進連絡協議会を組織し、地域教育フォーラムや地域セミナーを開催した

びの場を組織したりしてきている。

そのような立場から地域交流センターに期待することはただ一つ、「地域に開かれた大学づくり」大学の知を生かした地域貢献・地域との連携・地域の活性化への寄与の具体化である。時代や地域の要求を的確につかまえて、地域という外に「具体的に」歩み出してほしい。地域住民に役立つ研究成果を書いてくれたり、山奥の学校にも来てもらいたいのである。幼稚園から高校までの一四年間の接続教育をどう構想し、専門科目の研究とどう繋げていこうとしているのか、地域の声をどうとらえ、地域の諸団体にどんなアプローチをしようとしているのかを明確に示し、地域のしたたかな経験知とともにすすむ「開かれた地域交流センター」であってほしいと願っている。地域教育推進担当は、そのための全面的な協働体制や共同体を強固につくりあげる土壌づくりを今日もつづけている。

浅沼 茂夫（富士北麓・東部教育事務所
地域教育・主幹）

「地域と共に歩く都留文科大学の姿勢に、心うたれました。当地でも、市民大学という講座が毎年ありますが、このように地域と密着した活動はありません。地域の生活ー子どもから大人までーまるごとを地域の来々と共に大学が考えようという、本来あるべき大学の姿かと、嬉しくなりました。私も都留市に住んでみたい気持ちにさせられました。」（荏原八笑子氏：相模原市民）
「通信楽しく拝見しました。いかにも都留文大らしいという感じ。こういう地道な積み重ねが、底力になるのでしょう。」（上田薫元学長）など、すでにさまざまな反響が寄せられています。これからもぜひ、読者のみなさんの感想や情報をお寄せください。（畑潤：編集長）



編集後記

「地域交流センター通信」は年4回の発行を予定していましたが、諸般の事情で本号は、第3号、第4号の合併号とし、それぞれに予定していた内容を特集1、特集2というかたちで編集しました。特集1では、都留文科大学が地域の子ども・教育と手をつないでいく試みをテーマにしました。特集2では、地域の文化と大学の専門的学問との共同を、地域博物館という角度から光をあててみました。
この「通信」は、地域交流研究センターの生命というべきものです。その編集をとおして、地域と大学、学生と教職員、専門諸科学、都留文科大学と全国各地あるいは世界、など多面的な質の交流・共同を生みだしていこうと志しております。

DTP制作：北垣憲仁・清水亮・西教生・畠田真奈
表紙写真：佐藤洋「彫刻に取り組む子ども」

03・04合併号

地域交流センター通信 第3・4合併号：2004年3月24日

編集：都留文科大学 地域交流研究センター・通信担当（今泉吉晴・森博俊・畑潤・北垣憲仁）

発行：都留文科大学地域交流研究センター

〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1 tel.0554-43-4341(代)